

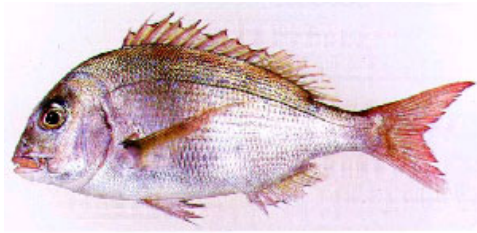
# 平成18年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 マダイ

学名 *Pagrus major*

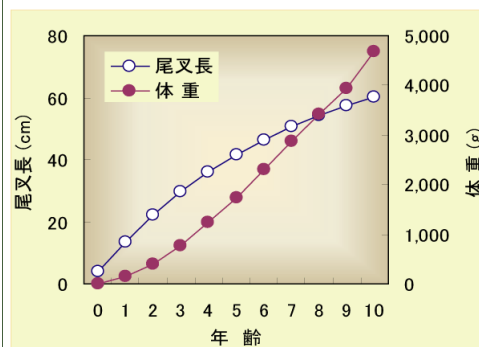
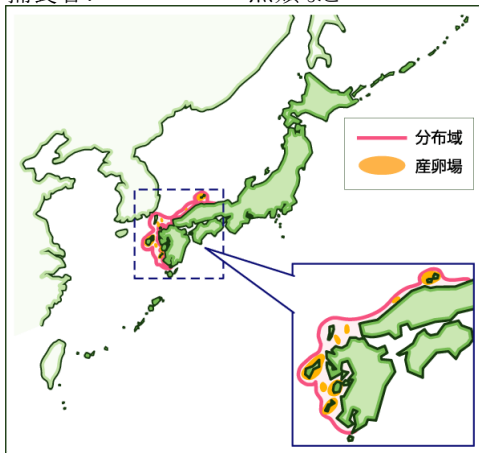
系群名 日本海西部・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 約20歳  
成熟開始年齢: 3歳(50%)、4歳(100%)  
産卵期・産卵場: 冬～春季(2～5月)、主に隠岐や五島など島回りの沿岸域  
索餌期・索餌場: 夏～秋季、主に沿岸域  
食性: 稚魚は動物プランクトン、成魚は甲殻類や貝類、多毛類などの底生動物類が主体  
捕食者: 魚類など

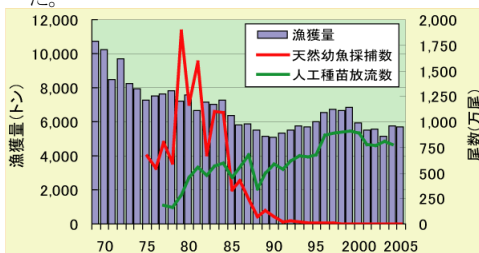


## 漁業の特徴

本種を対象とする漁業には、船びき網、釣り、延縄、刺網、沖合底びき網、定置網、小型底びき網、まき網など多様な漁法が見られる。養殖も盛んで、全国における生産量は天然漁獲量の約5.6倍に達している。県別の漁獲割合は、福岡県が最も多く(26%)、長崎県(25%)、山口県(15%)、熊本県(13%)がこれに次ぐ。遊漁による漁獲量は1997年で全体の2.1%と推定されている。

## 漁獲の動向

1969年の11,000トン进行ピークに、1990年の5,100トンまで減少した。その後は増加傾向に転じ、1999年の6,800トンまで回復したが、2000年以降は再び減少に転じ、2003年には1990年と同じ最低水準に戻った。2004年の漁獲量は5年振りに増加して5,700トン、2005年も5,690トンとほぼ変わらなかった。人工種苗の放流数は、1999年に914万尾に達した後は減少傾向に転じ、近年は800万尾付近を前後しており、2004年は前年より28万尾減少して780万尾であった。

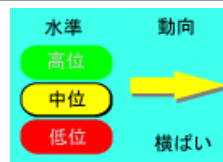


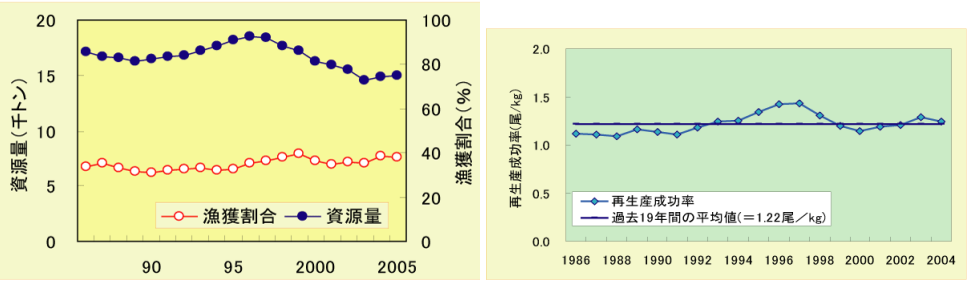
## 資源評価法

各県ごとに推定された年齢別漁獲尾数を足し合わせた系群全体の年齢別漁獲尾数に基づき、Popeの近似式を用いたコホート解析を行ったが、推定精度が低いと見られる0歳魚は除外した。プラスグループ(10歳以上)の資源尾数については平松(1999)の方法を用い、最近年の選択率は過去3年間の平均とした。自然死亡係数は年齢によらず一定とし、寿命を20年として田内・田中の方法で求めた0.125を用いた。

## 資源状態

2005年の資源尾数は2,600万尾、資源量は15,000トンと推定された。2005年の資源量と資源尾数は過去最低を脱して、それぞれ最高年の81%と76%のレベルにあり、前年と比較すると前者は微増、後者は横ばいを示した。魚価の下落や日本海でのエチゼンクラゲ異常発生のために漁獲努力量は減少している可能性がある一方で、漁獲量は5年振りに増加した前年とほぼ同水準であった。また、再生産成功率は過去平均を上回っている。これらのことから、資源水準は中位で、資源動向は横ばい傾向を示していると判断された。



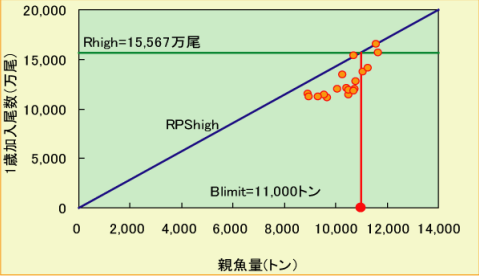


**管理方策**

2005年の親魚量は昨年とほぼ変わらなかったため、昨年同様に親魚量の回復を目標とする。目標親魚量は、再生産関係においてRhighとRPShighの交点から求まるBlimit (= 11,000トン)とする。2006年以降の再生産成功率は過去19年間の中央値と仮定し、10年後の2016年に親魚量がBlimitまで回復するFをFlimitとした。さらに安全率 (= 0.8) を乗じたものをFtargetとしてABCを算定した。

|           | 2007年漁獲量 | 管理基準    | F値   | 漁獲割合 |
|-----------|----------|---------|------|------|
| ABClimit  | 4,900トン  | Frec    | 0.45 | 34%  |
| ABCtarget | 4,100トン  | 0.8Frec | 0.36 | 29%  |

- ABCに0歳魚は含まない
- F値は各年齢の平均値
- 漁獲割合＝ABC/資源重量



**資源評価のまとめ**

- 現在の漁獲は成長乱獲傾向
- 2005年の再生産成功率は前年よりやや減少した
- 親魚量は2004年とほぼ同じであった

**管理方策のまとめ**

- 漁獲を抑制して親魚量を回復させる
- 10年後の親魚量が11,000トンへ回復することが管理目標
- 0歳魚の保護や放流による添加を図る

資源評価は毎年更新されます。